

Sa iki jou ka machi i seki

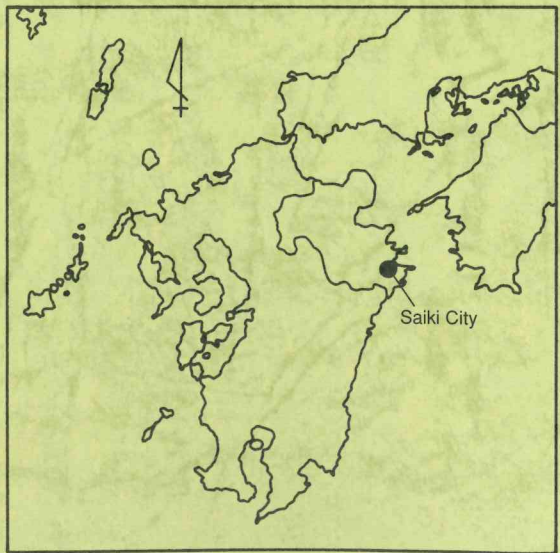
佐伯城下町遺跡

Yama naka ke ya shiki ato Take naka ke ya shiki ato
山中家屋敷跡 ・ 竹中家屋敷跡

平成13年度予防治山事業(城山)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

大 分 県
佐伯市教育委員会



序 文

本書は、城山治山工事に伴い佐伯市教育委員会が実施した、佐伯城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

佐伯市は大分県南部に位置し、天然の良港に恵まれた温暖な土地柄です。近世においては毛利藩二万石の城下町として栄え、現在でも市中心部の城山山頂に残る城跡が、市民の憩いの場となっています。

今回の調査地点は、歴史的環境保存地区にも指定された、武家屋敷通りの一画にあります。調査では城山山麓を階段状に整地した屋敷跡において石垣4基を検出し、整地層からは陶磁器類などが出土しました。

調査区は歴史資料館建設予定地の一部であり、佐伯市にとって歴史的に重要な地区でもあることから、調査の結果を受けて工法変更により遺跡は保存されることになりました。

本書が広く活用され、当地域の歴史研究の一助になれば幸いに存じます。

最後に、本発掘調査の実施ならびに遺跡の保存に、深いご理解とご協力を賜りました大分県佐伯南郡地方振興局林業課、大分県教育委員会をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月31日

佐伯市教育委員会

教育長 藤 浦 武 久

例 言

1. 本書は平成13年度(2001)に発掘調査を実施した、予防事業平成13年度佐第6号予防治山事業(城山)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査地点は佐伯市字城山、城下東町776番2、同779番に所在する。
3. 発掘調査は佐伯市教育委員会が主体となり、平成13年3月1日から3月23日までと平成13年4月16日から6月19日まで実施した。
4. 調査にあたって、大分県教育庁文化課主査小柳和宏氏の指導を受けた。
5. 調査は佐伯市教育委員会社会教育課の吉武牧子が担当した。
6. 遺構の実測、写真撮影は調査担当者が行った。
7. 地形測量、石垣の実測は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8. 発掘作業員の派遣は(社)佐伯地域シルバー人材センターに委託した。
発掘作業員氏名 河野孝義 河野義喜 高橋幸一 野口茂康 浜野正治
矢野順一
9. 遺物の実測、浄書、写真撮影は雅企画(有)に委託した。
10. その他図版の浄書は吉武が行った。
11. 遺物観察表の土器胎土の色調は『新版 標準土色帖』(1967 日本色研事業株式会社)に従った。
12. 本書の執筆、編集は吉武が行った。

目 次

I. 調査に至る経過	3
II. 佐伯城下町と調査地点の歴史的背景	3
III. 調査の成果	7
1. 調査の概要	7
2. 遺 構	8
(1) 石 垣	8
(2) 土 坑	13
3. 遺 物	14
(1) 陶磁器・土器類	14
(2) 金属製品	19
IV. まとめ	20

I. 調査にいたる経過

佐伯市は、佐伯城の築かれた城山とその東麓部の城下町を中心に発展した都市である。そのような経緯から、現在も市街地中心部となっている城山山麓には住宅が密集する地区が多く、谷筋には雨水の流路となる側溝が埋置されている。しかし、近年梅雨期や台風シーズンなどの大雨で、側溝の許容量を越える小規模な土石流がしばしば発生する事態となり、付近の住宅に被害を及ぼす恐れが高まっていた。そこで大分県では、住民の要望を受けて城山山麓部の予防治山事業を実施することになり、その予定地について佐伯市林業水産課から市教育委員会に埋蔵文化財の有無についての照会があった。2箇所の工事地点について市教委で確認したところ、1箇所は佐伯城下町遺跡の範囲内で、歴史的環境保存地区にも指定された山際通りの一画である点、歴史資料館建設予定地の一部に含まれる点などを考慮し、調査の必要ありと判断した。

工事は谷に2基の谷止工を設置するというもので、そのための仮設道建設地が調査対象となった。工事地点は近世の武家屋敷跡であり、調査前の時点ですでに石垣4基を確認していた。前述したように調査地点は、資料館建設予定地の一部として将来整備する計画であり、歴史的環境保存地区でもあることから、県振興局林業課との協議の結果、掘削箇所をできるだけ少なくし、石垣は盛土により保存することで合意した。

調査は2001年3月1日から23日までと4月16日から6月19日まで実施した。面積は約480m²で、調査区は斜面と階段状に整地された4つの平場から成る。そのうち掘削予定である第1、2、4平場と4基の石垣を主な調査対象とし、第1平場では2基の土坑を検出した。第2平場からは石組状のものが出土し当初建物基礎と考えたが、規則性がまったく見られなかったため地山礫の流れ込みと判断した。この他、第1、2平場の表土及び整地層からは近世陶磁器などが出土したが大半が細片であった。

調査は事前の協議結果に従い、盛土で石垣を保存する方向で進めてきたが、3号石垣の崩壊が予想以上に進んでいることが判明したため再度協議を行った。その結果工法変更により工事用道路を設置する計画が見送られることになり、遺跡は保存されることとなった。

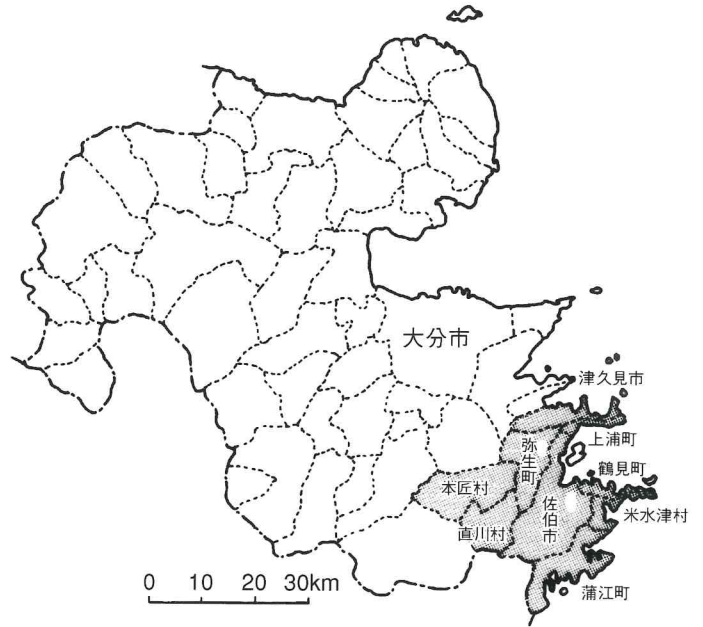
II. 佐伯城下町と調査地点の歴史的背景

豊後における諸藩の成立は関ヶ原の戦後本格的に始まり、江戸時代中期には八藩七領に分立、以後幕末までいわゆる「小藩分立」の状況が存続する。「八藩」とは中津藩(奥平氏)10万石、杵築藩(能見松平氏)3.2万石、日出藩(木下氏)2.5万石、府内藩(大給松平氏)2.22万石、森藩(久留島氏)1.25万石、臼杵藩(稲葉氏)5万石、佐伯藩(毛利氏)2万石、岡藩(中川氏)7万石である。

佐伯藩初代藩主毛利高政は日田・玖珠両郡の蔵入り地を支配していたが、関ヶ原の戦後の慶長6年(1601)、佐伯の地に転封された。石高は2万石である。藩領は現在の行政区分でいうと、津

久見市南部と佐伯市、弥生町、本匠村、直川村、上浦町、鶴見町、米水津村、蒲江町のほぼ全域に渡る(第1図)。

高政は中世佐伯氏の拠点であった梅牟礼城を廃し、番匠川河口の八幡山山頂(現城山、標高約140m)に新たな城を築くことを決定する。藩政史料によると慶長7年、新城の普請は開始され、遅くとも慶長11年には三層の天守をもつ城郭が完成した。ただし、山上の城館を使用したのは2代高成までで、寛永年間には城山麓の下屋敷(現佐伯文化会館所在地)に藩政の中心を移している。

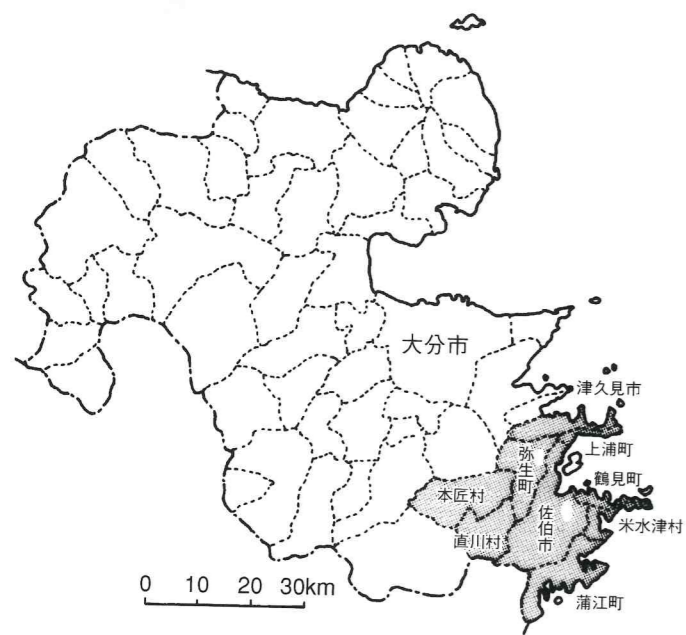


第1図 佐伯藩の領域

一方、城下町の建設地には城山東麓の沖積地を選定。城周囲の山際を中心に武家地、その東の「塩屋千軒」と呼ばれる地域に梅牟礼城下を移設し町人地とした。さらに周辺の干潟を埋め立てて拡大し、南の番匠川沿いにも町人地である船頭町が形成された。城下町は西に城山、南、北、東側には番匠川の本流、支流を外堀として配し、城下の各所に水路を通すなど火災あるいは軍事面での備えとなるよう設計されている。城下町の範囲は第2図に示したとおり、青色で表した部分が堀、その内側が城下である。

三の丸跡(下屋敷)から城山に沿って北に伸びる山際通りは、上級武士の屋敷地であった。一帯は現在も武家屋敷が残るなど、佐伯市内で歴史的景観を伝える数少ない町並として重要視されている。調査地点はこの山際通りから城山方向に20m程入った武家屋敷跡である。佐伯城下を描いた現存する最古の絵図、元文三年「御城並御城下絵図」(以下元文絵図)によると、調査地点は2軒の武家屋敷にまたがっている。絵図の書き込みから、通りに面した区画は羽野家の屋敷とわかる。山側は文字の判読がむずかしいが、永留あるいは永富家であろう。また、これより時代の下る文政九年「御城下分見明細図絵」、「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」(大正年間写し)では、山際通りに面する山中家と隣接する竹中家区画の一部に相当する。

今回の調査では整地層と考えられる地層から、18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土しており、19世紀前半代に整地が行なわれたものと推定できる。

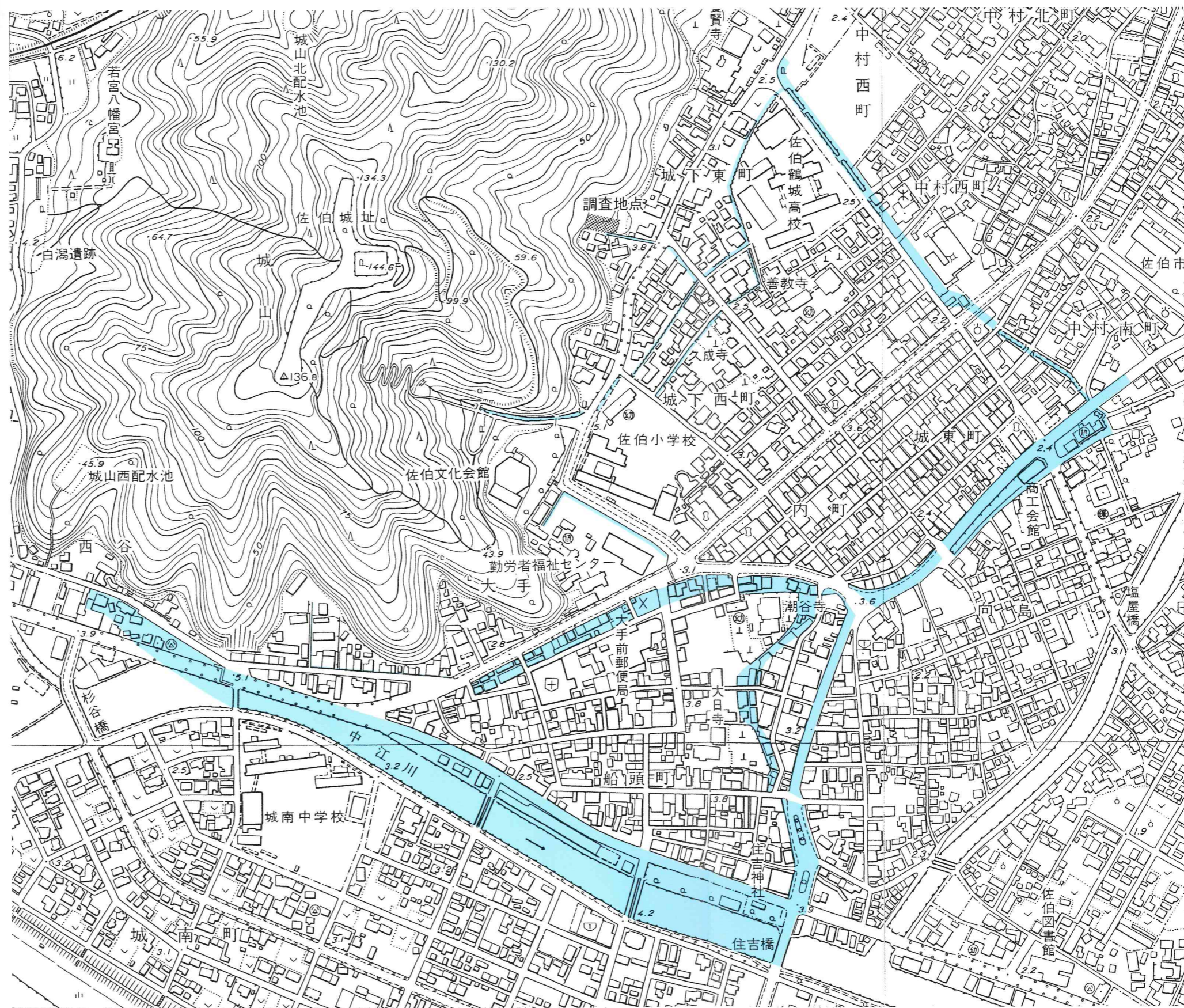


第1図 佐伯藩の領域

家地、その東の「塩屋千軒」と呼ばれる地域に梅牟礼
下湯を埋め立てて拡大し、南の番匠川沿いにも町人地
成山、南、北、東側には番匠川の本流、支流を外堀と
あるいは軍事面での備えとなるよう設計されている。
で表した部分が堀、その内側が城下である。

山際通りは、上級武士の屋敷地であった。一带
史的景観を伝える数少ない町並として重要視されて
に20m程入った武家屋敷跡である。佐伯城下を描い
城下絵図」(以下元文絵図)によると、調査地点は2
込みから、通りに面した区画は羽野家の屋敷とわか
あるいは永富家であろう。また、これより時代の下
年頃佐伯藩時代屋敷図」(大正年間写し)では、山際
一部に相当する。

ら、18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土しており、
できる。

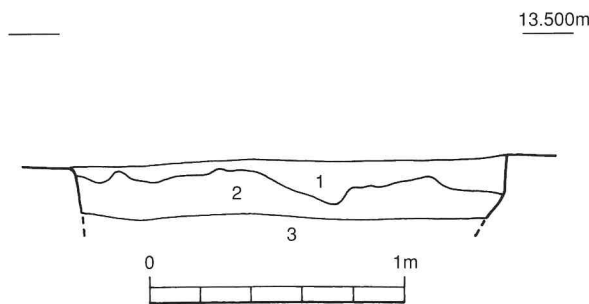


第2図 佐伯城下町の範囲と調査区位置図 (国土地理院発行 1:5,000 使用)

Ⅲ. 調査の成果

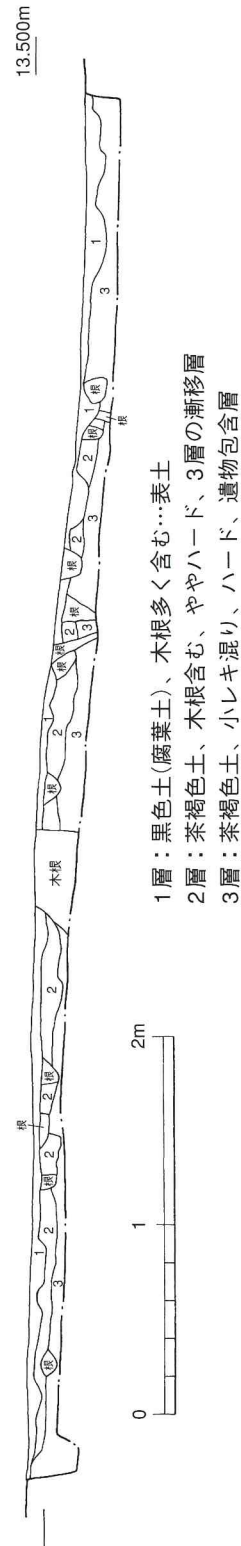
1. 調査の概要

調査区は佐伯城跡である城山山麓斜面とその斜面を階段状に整地した4つの平場から成る。平場は標高の高い方から順に第1～第4平場とした。調査は当初12年度に行う予定であったが、事業日程の関係で12年度と13年度にまたがって実施することとなり、12年度は樹木の伐採と調査区周囲の測量を実施、作業員を投入しての実際の発掘作業は13年度に行った。調査区内では樹木の伐採後4基の石垣を確認し、標高の高いほうから順に1～4号石垣とした。調査はまず調査区上部の斜面に2ヶ所トレンチを入れ遺構確認作業を行った。しかし、重機で表土を除去するとすぐに地山の岩盤が露出し遺構、遺物は出土しなかった。次に第1、第2、第4平場の順に重機による表土剥ぎを行い、層が変わった段階で人力による掘削を行った。掘削面積はそれぞれ第1平場約21.8㎡、第2平場約44.96㎡、第4平場約19.24㎡である。第1、第2平場では表土の堆積は浅く、下層には近世の遺物を含む整地層を確認した(第3・4図)。また、第1平場の山際及び第2平場からは大小の礫が出土したため、当初建物の基礎石組と考え慎重に検出作業を行ったが、規則性がみられないことから流れ込みによるものと判断した。結局検出遺構は第1平場の土坑2基のみであった。第4平場からは遺構・遺物とも出土しなかった。



- 1層：黒色土(腐葉土)…表土
- 2層：茶褐色土、ハード…近世の整地層 第1平場3層と同一
- 3層：明茶褐色土(レキ混層)

第3図 第2平場北東壁土層図 (S=1/30)



- 1層：黒色土(腐葉土)、木根多く含む…表土
- 2層：茶褐色土、木根含む、ややハード、3層の漸移層
- 3層：茶褐色土、小レキ混り、ハード、遺物包含層

第4図 第1平場南東壁土層図 (S=1/40)

2. 遺 構

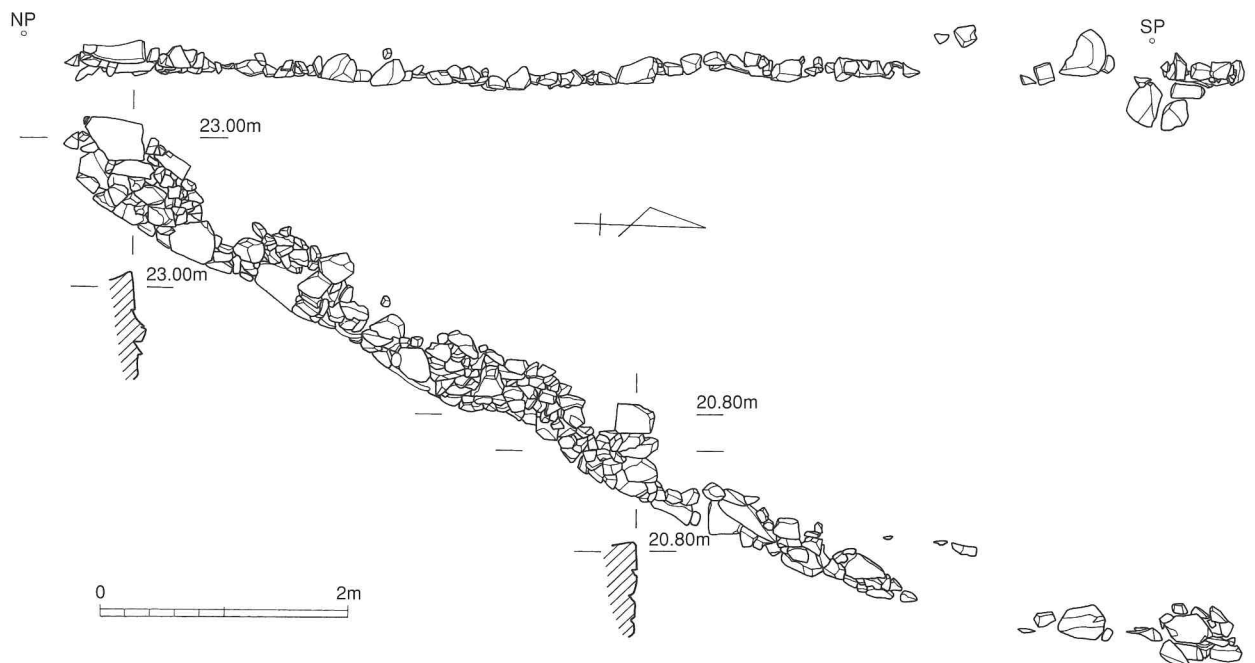
(1) 石 垣

石垣は地表面に露出した部分のみ調査対象とし、基礎部分までの掘削は行わなかった。

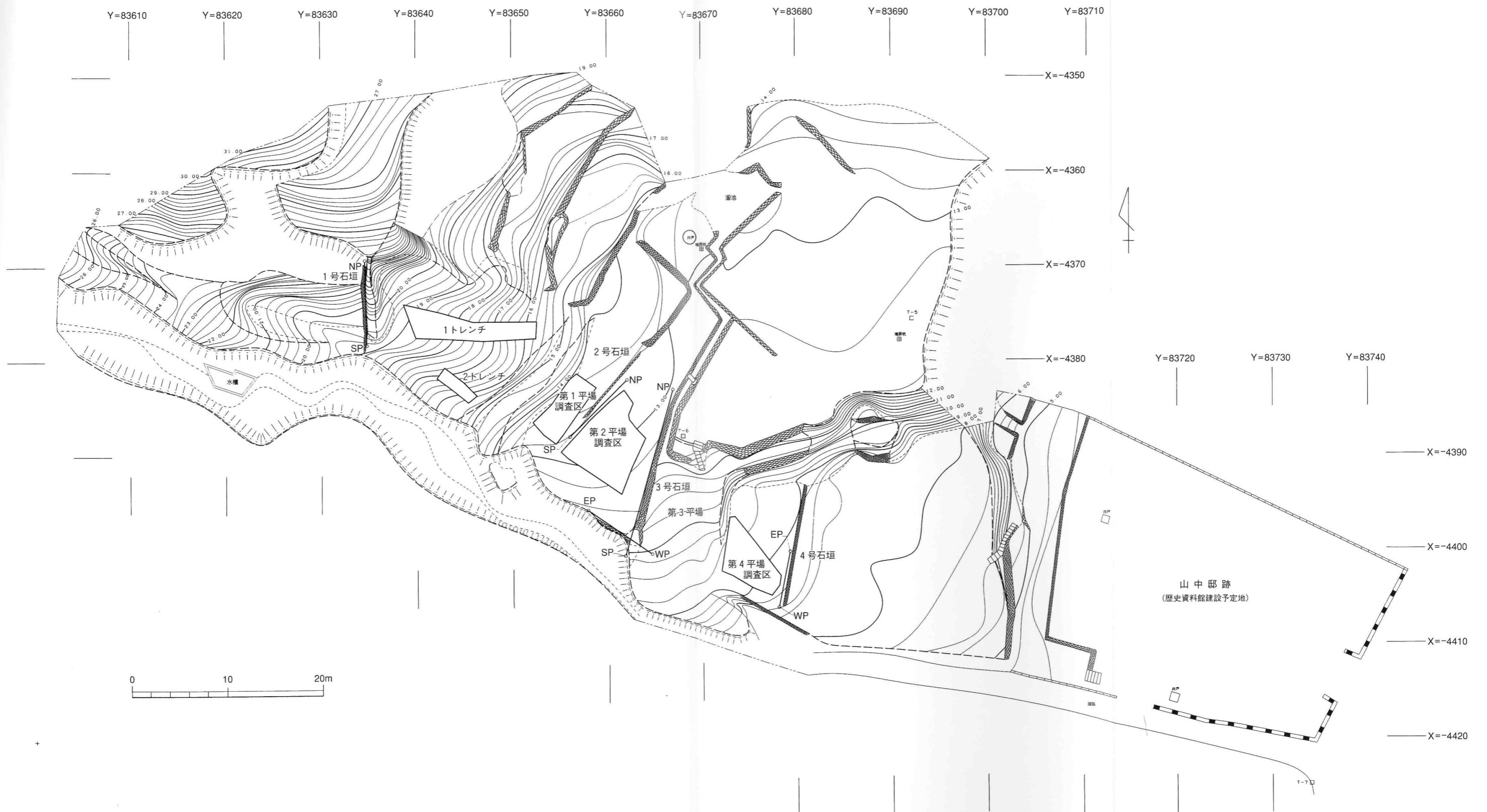
1号石垣 (第5図)

調査区において確認した4基の石垣で最も標高の高い位置にあるもので、水平ではなく南側の谷に向かって下るように築かれている。石垣の高い部分と低い部分の比高差は、基底部で約3.7mであった。1号は他の3基と異なり、正面を城山に向けており、背面からは見えないようになっている。天端には杉が生えて部分的に石が崩落するなど、保存状態は良くない。現状での計測値は、南北の長さ(基底部)が10m(途中1箇所途切れている)、比較的残りの良い北端の高さが81cmである。

石垣は所々に50cm前後の築石が使われているほかは、拳大から人頭大程度の小礫で築かれている。石材は砂岩質であることから城山の岩盤と考えられるが、脆く割れやすい。



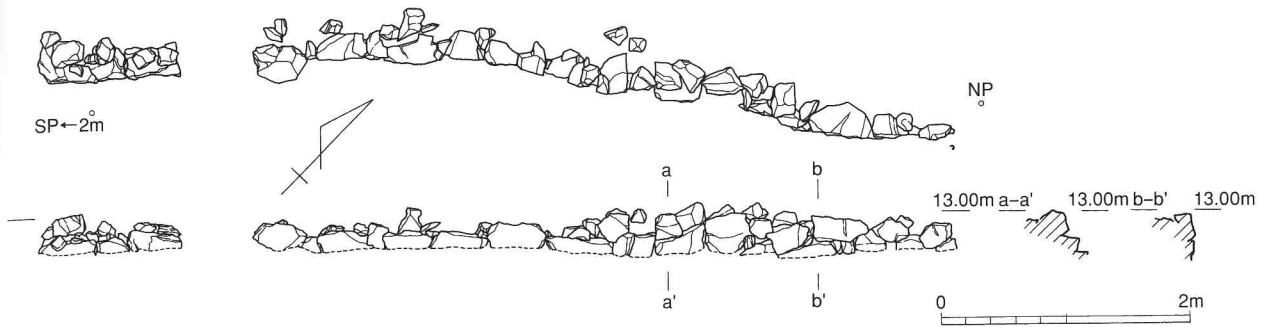
第5図 1号石垣実測図 (S=1/60)



第6図 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡周辺地形測量図と調査区位置図 (S=1/400)

2号石垣（第7図）

第1平場と第2平場の境に築かれた低石垣であり、その範囲は調査区内にとどまらず北へ伸びる。途中1箇所石の抜けた部分があるが、調査部分の長さ7.3m、高さ42cmを測る。城山の岩盤と考えられる泥岩質の石材を使用。



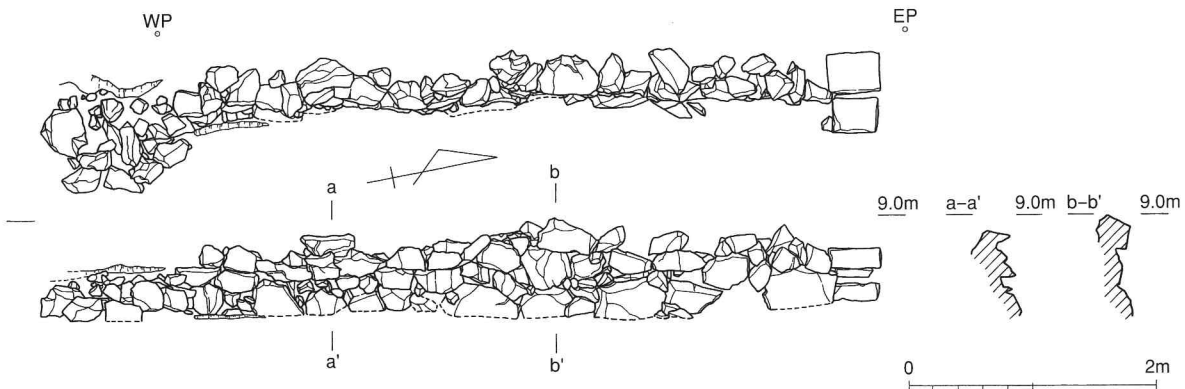
第7図 2号石垣実測図（S=1/60）

3号石垣（第9図）

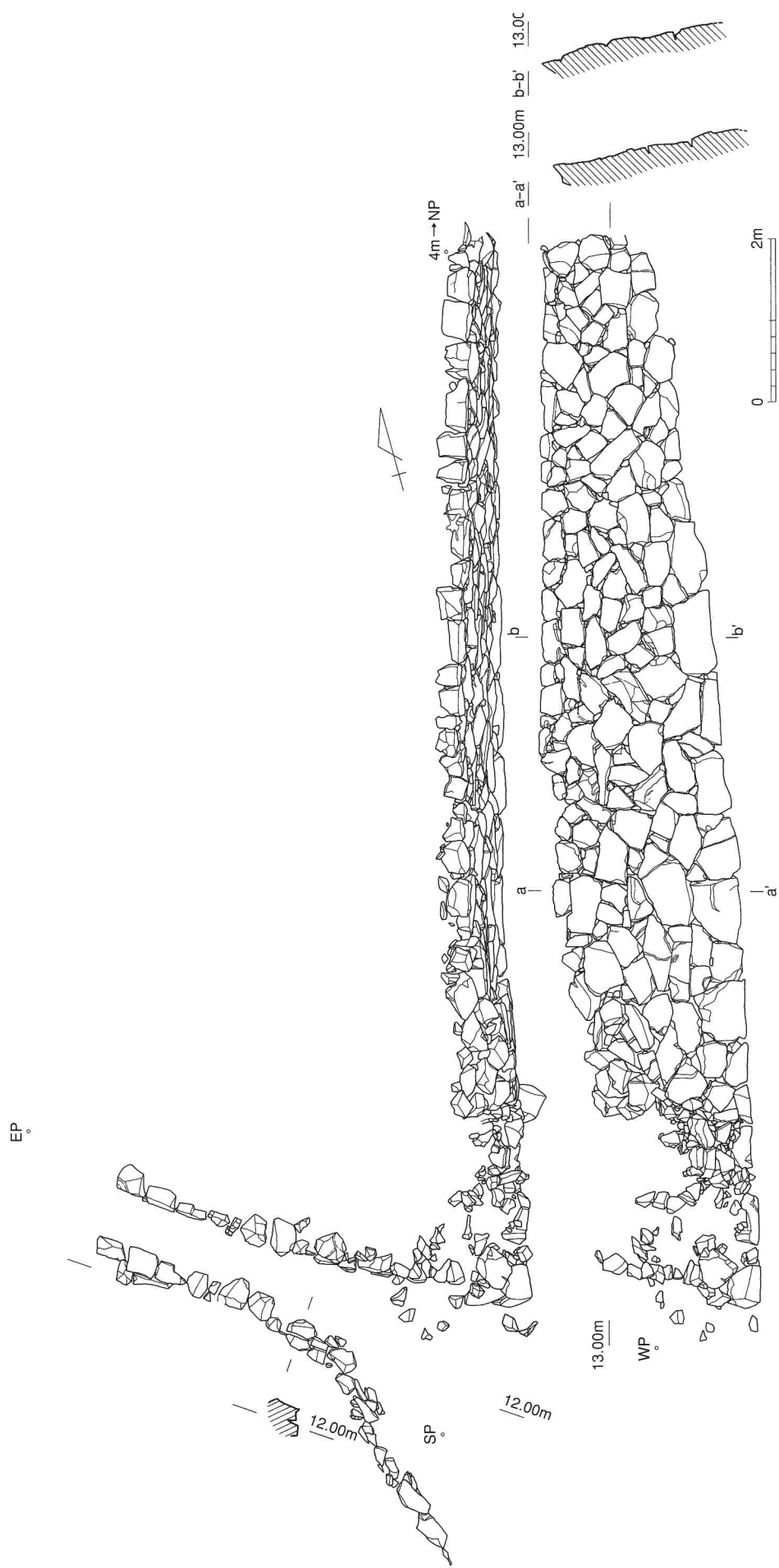
第2平場と第3平場の境に築かれた調査区中最大規模のものである。基底は水平ではなく南に向かって低くなる。基底部の比高差は1.35m。石垣は南北方向に築かれ、第3平場の南端から調査区を超えて北に続く。天端石のみ南隅で折れ谷側の斜面上端に沿って西に伸びる。石垣は南端から北へ2.4mまでの幅で大きく崩れ、続く1.5m程の範囲でも崩壊が進みつつある。調査区内の基底部長12.9m、中央南寄りの高さ2.3m、北端の高さ1.3mを測る。石材は泥岩質で城山岩盤を利用したのと考えられる。

4号石垣（第8図）

第4平場と第5平場の境に造られた低石垣。第5平場南端から調査区を超えて北に続く。石垣北端に置かれた長方形の2つの石は、コンクリート製である。調査区内の基底部長6.6m、高さは78cmである。石材は他と同様である。



第8図 4号石垣実測図（S=1/60）



第9图 3号石垣美测图 (S=1/75)

(2) 土 坑

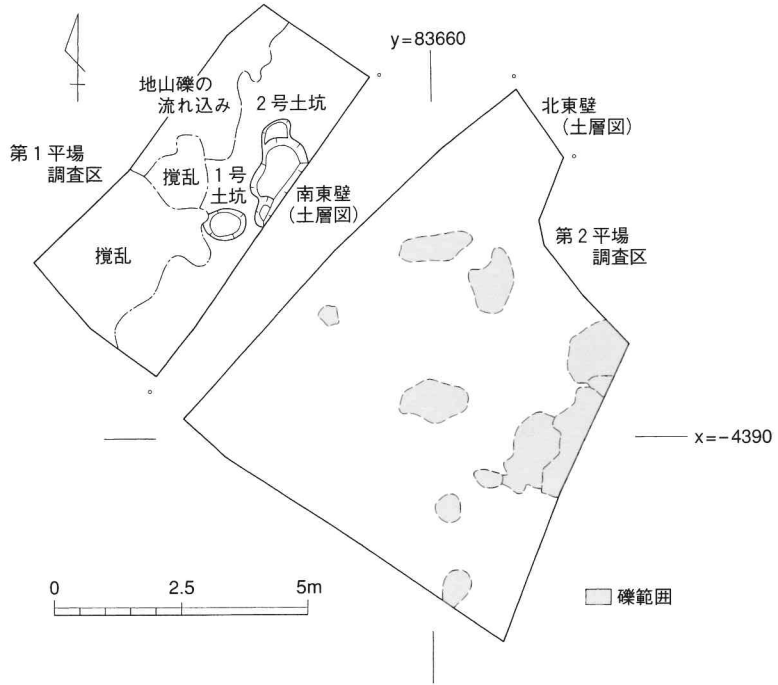
第1平場3層中から2基の土坑を検出した。

1号土坑 (第11図)

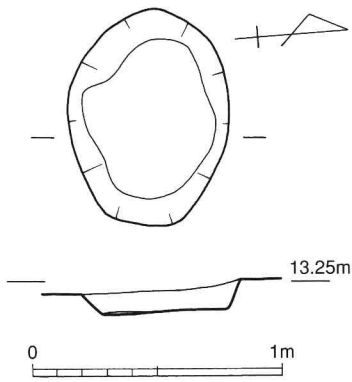
長径80cm、短径65cm、深さ11cmの楕円形を呈する土坑である。19世紀前半～中頃の瓦質土器火鉢把手1点が出土した。

2号土坑 (第12図)

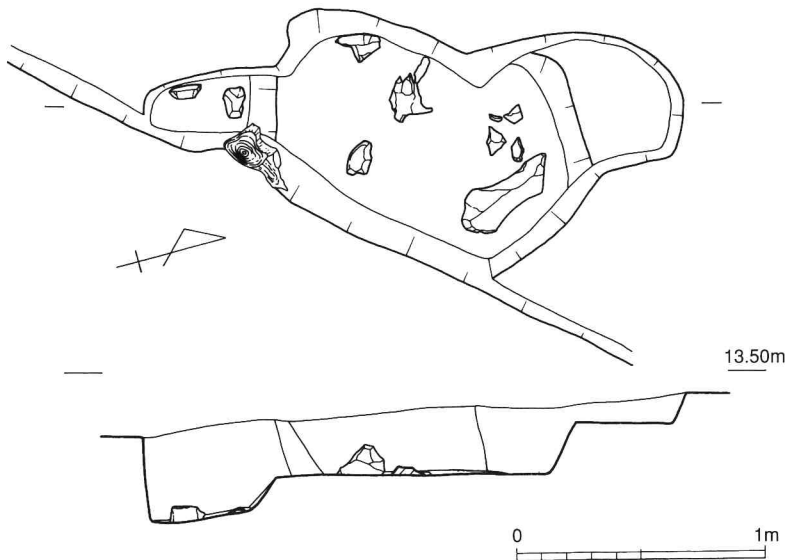
調査区の制約から全体を検出していないが、長径215cm、深さ37cmの不定形土坑。18世紀後半～19世紀中頃までに比定される遺物が出土した。



第10図 調査区遺構配置図 (S=1/150)



第11図 1号土坑実測図 (S=1/30)

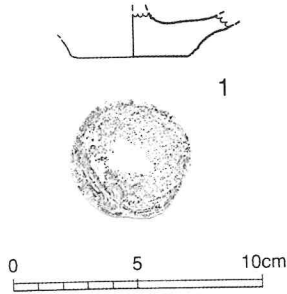


第12図 2号土坑実測図 (S=1/30)

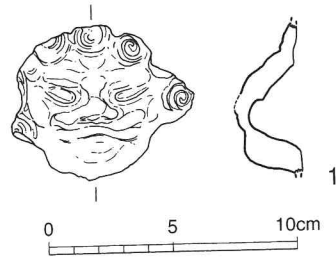
3. 遺物

(1) 陶磁器・土器類

今回の調査では2号石垣、1・2号土坑、第1及び第2平場の整地層中から、主として18世紀後半以降の近世陶磁器類、土器類が出土した。個別の説明については観察表を参照されたい。



第13図 2号石垣出土遺物 (S=1/3)



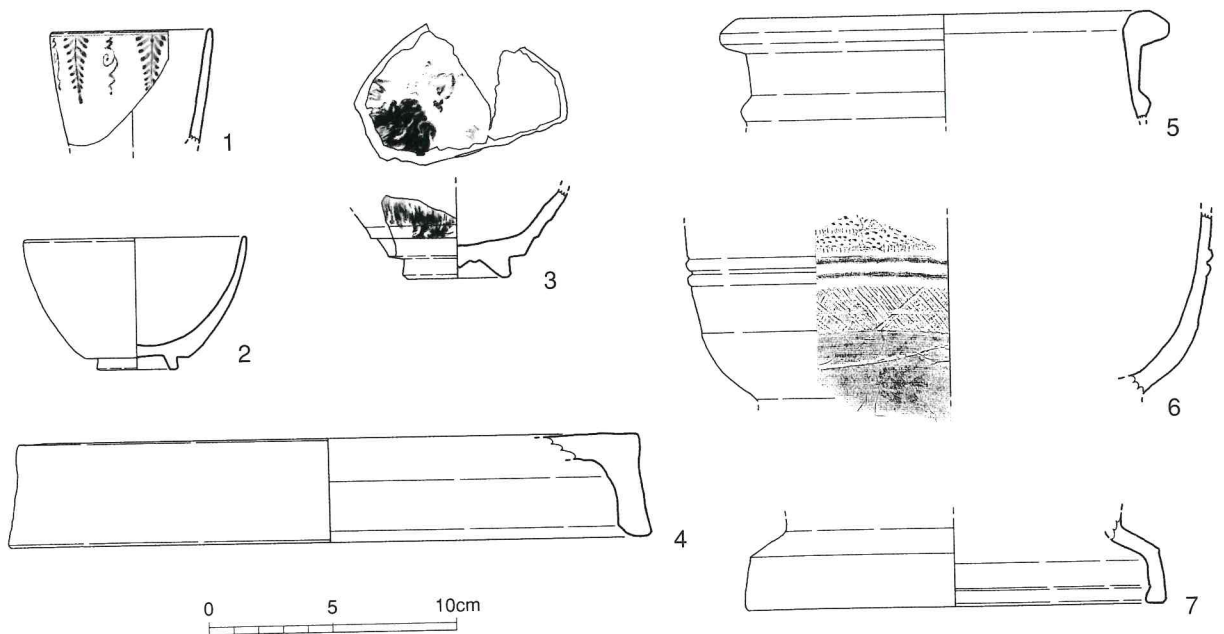
第14図 1号土坑出土遺物 (S=1/3)

第1表 2号石垣出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径						
1	土師質土器底部	—	(1.7)	4.6	白色砂粒 赤褐色砂粒	良好	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)			底部回転糸切り

第2表 1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径						
1	瓦質土器火鉢	—	—	—	金雲母細粒 石英細粒 赤褐色砂粒 白色砂粒	良好	外：褐灰(10YR4/1) 内：褐灰(10YR6/1)		19C前半 ~中頃	把手・獅子



第15図 2号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

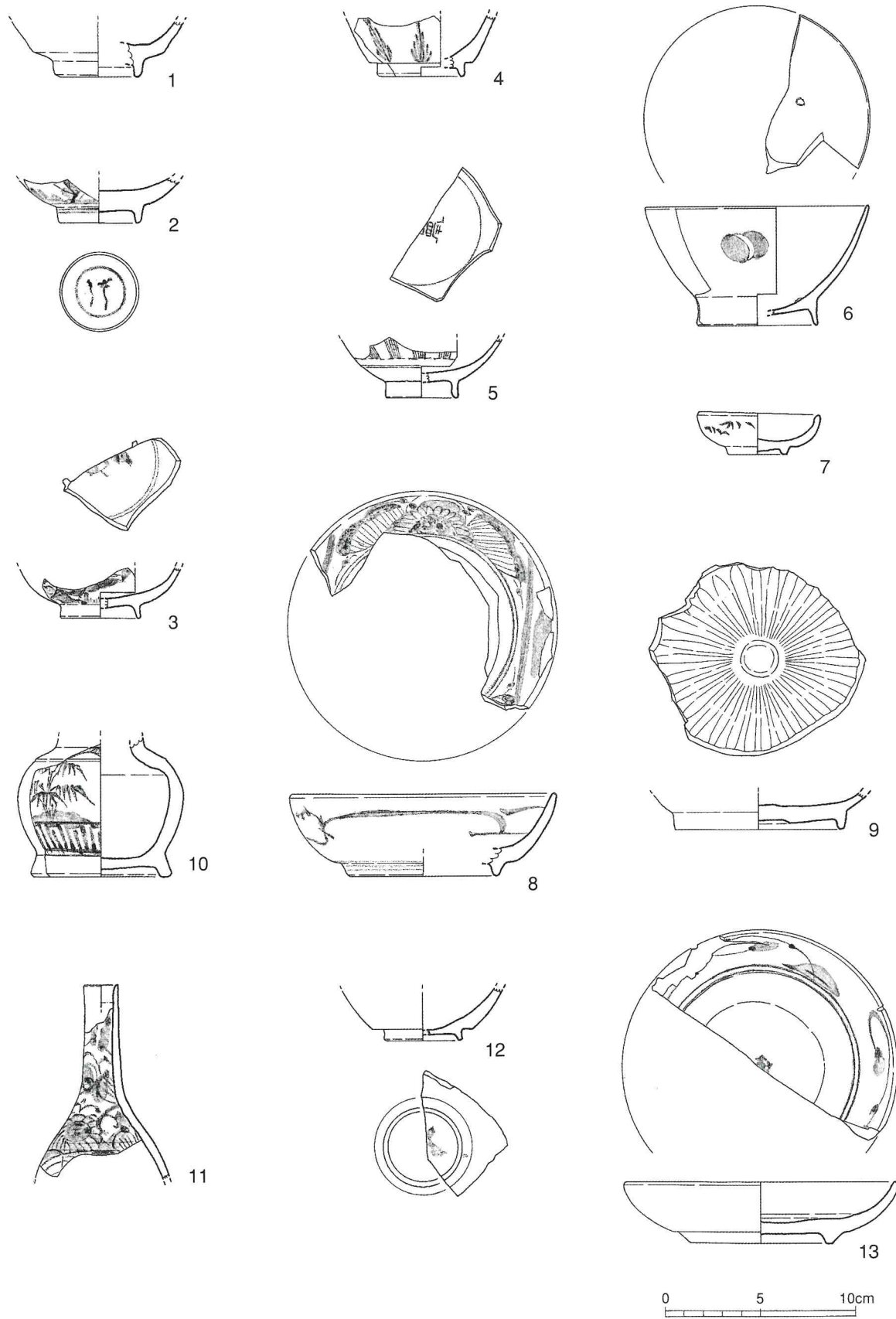
第3表 2号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法 量 (cm)			成形	装 飾			底 面 内 底	製作地	製作年代	備 考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文 様	装飾特徴				
1	磁器碗	(6.2)	(4.5)	—	口ク口	染付・透明釉	外：藤			肥前	1780～1810年代	筒形碗
2	陶器碗	(8.6)	5.2	3.0	口ク口	透明釉				関西	18C末～19C前半	
3	陶器碗	—	(3.5)	(3.9)	口ク口	藁灰釉・鉄釉				萩	19C	

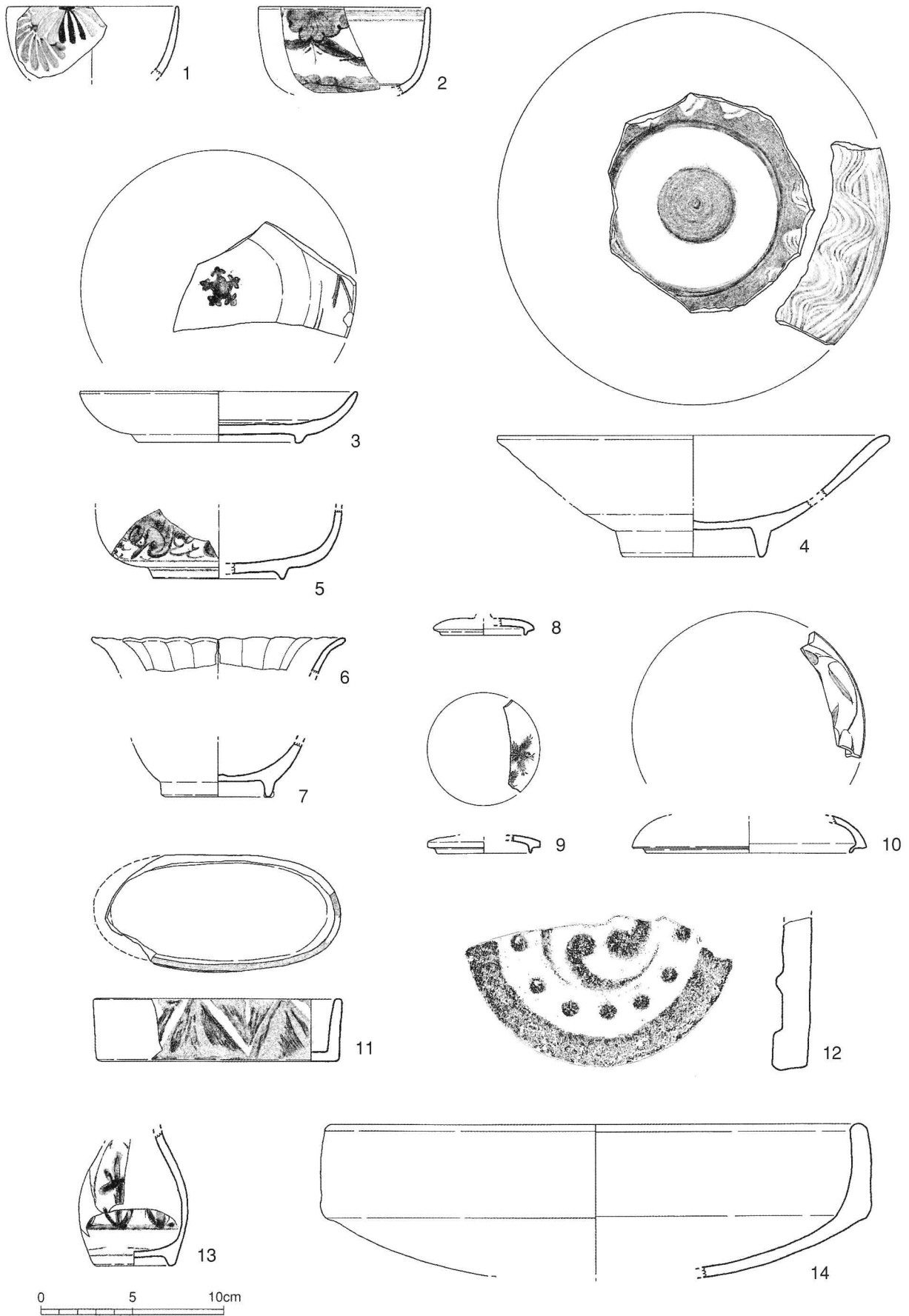
番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	製作地	製作年代	備 考
		口径	器高	底径						
4	土師質土器蓋	(25.3)	4.1	—	白色微粒	良好	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：にぶい橙 (5YR6/4)			径はゆがみの為 不確定 甕蓋
5	瓦質土器火鉢 (口縁部)	(16.2)	(4.3)	—	白色微粒 雲母を多量に含む	良好	外：黒 (2.5Y2/1) 内：黒 (2.5Y2/1)			5・6・7は 同一固体の 可能性あり
6	瓦質土器火鉢 (胴部)	—	(7.1)	—	雲母 多量 石英 少し	良好	外：暗灰 (N3/) 内：黒 (N4/)			
7	瓦質土器火鉢 (脚部)	—	(3.6)	(16.4)	白色微粒 少量 雲母 多量	良好	外：暗灰 (N5/) 内：灰 (N4/)			

第4表 第1平場出土遺物観察表

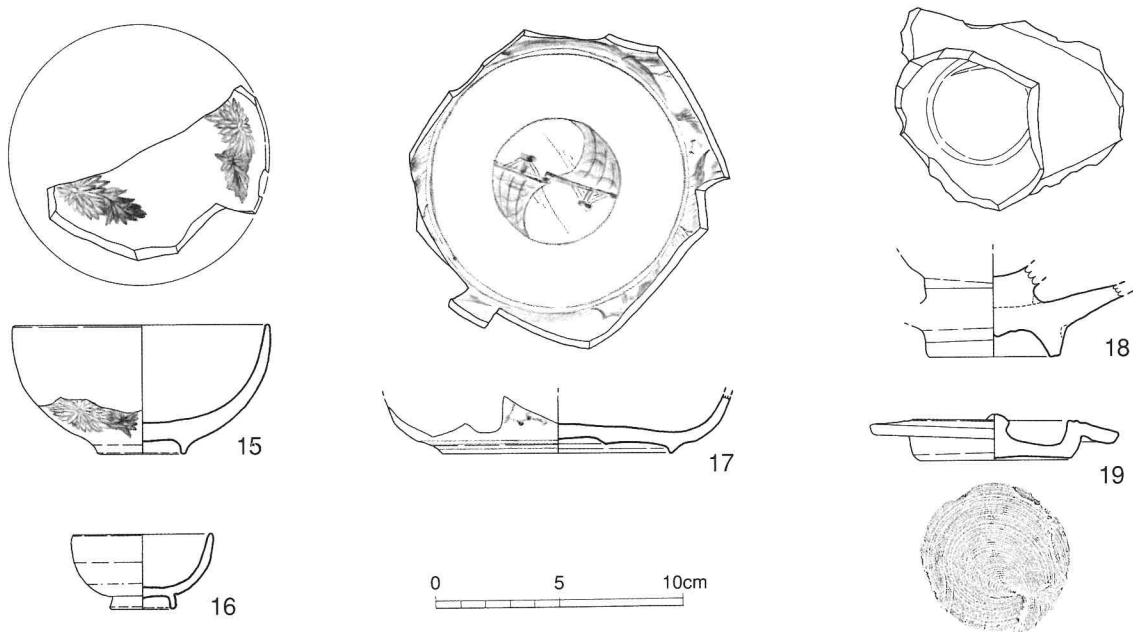
番号	器種	法 量 (cm)			成形	装 飾			底 面 内 底	製作地	製作年代	備 考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文 様	装飾特徴				
1	磁器碗	—	(2.8)	(4.0)	口ク口	青磁釉 透明釉				肥前	18C後半	
2	磁器碗	—	(2.2)	4.1	口ク口	染付 透明釉			「大明年 製」銘	肥前	18C後半	
3	磁器碗	—	(2.6)	(4.0)	口ク口	染付 透明釉	外：樹木			肥前	19C前半 ～19C中頃	
4	陶器碗	—	(3.1)	(4.4)	口ク口	鉄 絵 透明釉	外：根引き松			関西	18C末～19C前半	小杉碗
5	磁器碗	—	(3.0)	(3.6)	口ク口	染付 透明釉	外：寿字文 見込：寿字文			肥前	1780～1810年代	小広東碗
6	磁器碗	(11.4)	6.1	(6.1)	口ク口	染付 透明釉				肥前	1780～1810年代	目跡残存(全部の個 数不明) 広東碗
7	磁器小杯	6.2	2.1	3.0	口ク口	染付 透明釉	外：笹			肥前	19C代	外面付着物有 紅血
8	磁器皿	(13.4)	4.2	(7.3)	口ク口	染付 透明釉	外：唐草			肥前	18C中頃～後半	
9	磁器皿	—	(1.8)	8.6	口ク口	白磁	内：菊花 (陰刻)			肥前	19C前半～中頃	蛇ノ目凹型高台
10	磁器瓶	—	(7.1)	7.0	口ク口	染付 透明釉	外：竹笹 ・蓮弁			肥前	18C後半以降	
11	磁器瓶	(1.7)	(9.8)	—	口ク口	染付 透明釉	外：花唐草			肥前	18C後半	
12	陶器碗	—	(2.6)	(4.0)	口ク口	透明釉				関西	18C末～19C前半	内底に墨書 小杉碗
13	磁器皿	(14.0)	3.1	(7.2)	口ク口	染付 透明釉	見込：五弁花	コンニャク 印 判		肥前	18C代	見込蛇ノ目釉剥ぎ



第16図 第1平場出土遺物実測図 (S=1/3) (1~11:3層、12・13:攪乱層)



第17図 第2平場出土遺物実測図① (S=1/3) (1~12:3層、13・14:攪乱層)



第18図 第2平場出土遺物実測図② (S=1/3) (15~18:表土、19:排土)

第5表 第2平場出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴				
1	陶器碗	(9.0)	(3.7)	—	口ク口	色 絵 透明釉	外:菊花			関西	18C後半	
2	磁器碗	(9.0)	(4.6)	—	口ク口	染付 透明釉	外:花 内:二重圏線 見込:二重圏線			肥前	1780~1810年代	
3	磁器皿	(14.7)	2.7	(8.7)	口ク口	染付 透明釉	内:松葉 見込:五弁花	コンニャク 印判		肥前	18C前半	見込蛇ノ目釉剥ぎ
4	陶器皿	(21.0)	—	7.5	口ク口	白土 鉄釉	内:刷毛目			肥前	18C代	見込蛇ノ目釉剥ぎ 同一個体で接点無し
5	磁器鉢	—	(3.7)	(6.9)	口ク口		外:鶴			肥前	18C後半	
6	磁器鉢	(13.5)	(1.9)	—	型打	白磁釉				肥前	18C後半	輪花
7	陶器瓶	—	(2.9)	5.8	口ク口	鉄釉				肥前 or福岡	18C後半	高台畳付に アルミナ塗付
8	磁器蓋	(4.4)	(0.9)	(5.4)	口ク口	白磁釉				肥前	18C後半 ~19C前半	つまみのあった 可能性有
9	磁器蓋	(5.0)	(0.95)	(6.0)	口ク口	染付 透明釉	外:松			肥前	18C後半 ~19C前半	
10	磁器蓋	(11.0)	(2.0)	(12.5)	口ク口	染付 透明釉	外:唐草			肥前	18C後半 ~19C前半	
11	磁器餐皿	(長:13.2) (短:6.4)	3.35	(長:12.8) 短:6.0	板作り	鉄釉 透明釉	外:幾何文?			肥前	17C末~18C初頭	
13	磁器瓶	—	(7.2)	4.1	口ク口	染付 透明釉	外:草花 ・若松			肥前	19C前半~中頃	基筍底

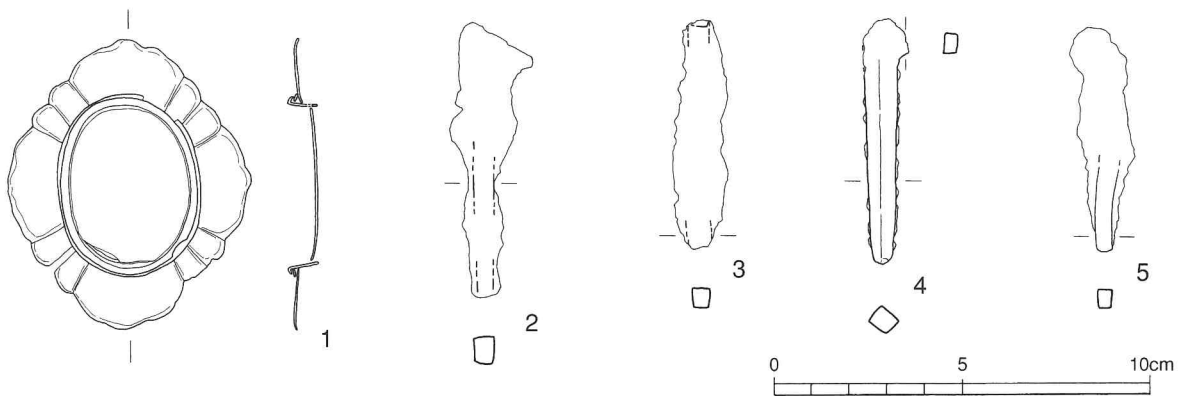
番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径						
12	軒丸瓦	復元瓦当径 (14.6)			角閃石微粒 長石粒 白色砂粒	良好	灰 (N5/ 割れ口は灰白 (5Y7/1)			
14	土師質土器焙烙	(28.4)	(8.1)	—	金雲母細粒 多量 石英小粒 白色砂粒 赤褐色砂粒	良好	外:にぶい橙 (5YR7/4) 内:にぶい橙 (5YR7/4)		18C前半 ~中頃	

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴				
15	磁器碗	(10.0)	5.1	(3.4)	ロク口	染付 透明釉	外：菊花 内：菊花	コンニャク 印判		肥前	18C前半	
16	陶器小杯	5.4	2.95	2.4	ロク口	透明釉				関西	18C代	
17	磁器皿	—	(2.3)	9.1	ロク口	染付 透明釉	外：唐草 内：山水 見込：帆			肥前	18C末～19C前半	蛇ノ目凹型高台
18	陶器 (器種不明)	—	上部(2.2) 下部(2.8)	上部4.3 下部(5.2)	ロク口	透明釉						高台側面と見込みに 釉溜りがある。 残存総高 (4.1)
19	陶器蓋	9.8	1.8	—	ロク口	鉄釉				福岡	19C	底部右回転糸切痕 土瓶蓋

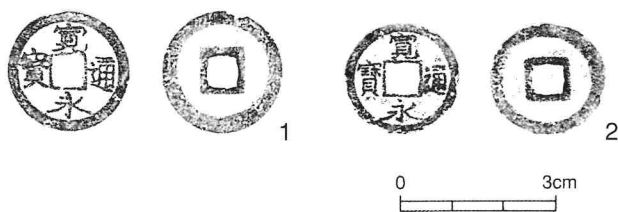
(2) 金属製品

第19図1は銅製の引手、2～5は鉄製の角釘である。引手は3つの部品を組み合わせで作られたものであるが、分離した状態で出土した。2箇所を目釘穴をもつ。一部に金が残っていることから、本来は金銅製だった可能性が高い。

第20図は銅銭で、1はいわゆる古寛永通宝(初鑄1636年)、2は新寛永通宝(初鑄1697年)である。



第19図 第2平場2層出土金属製品 (S=1/2)



第20図 第2平場出土銅銭 (S=2/3)

IV. まとめ

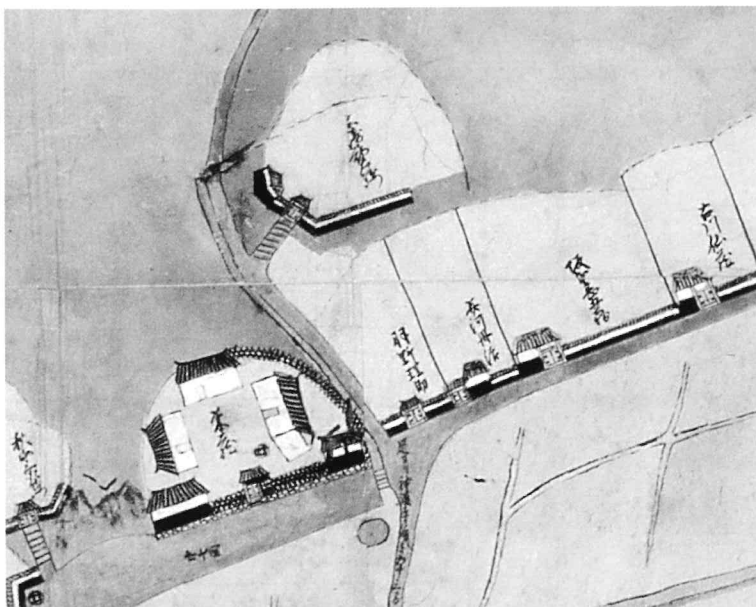
調査区を含む一帯は、佐伯藩家臣団の中でも比較的家禄の高い者の屋敷が並ぶ通りであった。近世の佐伯城下の様子を知る資料としては、①元文3年(1738)「御城並御城下絵図」、②文政9年(1812)「御城下分見明細図絵」、③「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」という年代の異なる絵図3点が残されている(①、②は原本あり、③は写しのみ)。調査地点を上記の絵図に照らし合わせると、時代によって居住者等に違いは認められるものの、山際通りに面した屋敷地と城山側に隣接する屋敷地の2軒の区画に相当するといえる。また、元文3年、文政9年の絵図ではその境界に石垣が描かれている(第21図)。以上の点を踏まえて今回検出した遺構及び整地層について検討を加えたい。

調査区内から山際通りまで整地によって造り出された階段状の平場は6つ、その中で調査対象としたのは、第1・2・4平場の3箇所と調査区内で確認した4基の石垣である。平場と平場の境に築かれた2～4号石垣を見ると、2、4号は単に造成地の土留めとしての役割をもつものといえるが、3号のみ規模と構造が他とは大きく異なることから、絵図に記された屋敷境の石垣に該当すると考えられた。3号石垣によって画された第2平場から北奥に続くやや広い造成地が、母屋のあった場所と推定される。また地元の話によると、1号石垣も屋敷地の区画のため築かれたということである。

この他、第1平場の東端からは土坑2基を検出した。当初ごみ穴の可能性を想定して掘り下げたが、少量の遺物しか出土しなかったため土坑の性格は不明である。また、第2平場では整地層下部から礫群が出土し、建物基礎である可能性を含めて慎重に精査したが、各礫群の並びに規則性は見られずすべて斜面からの流れ込みであると判断した。

次に整地層と石垣の年代を検討してみたい。出土遺物については大半が第1・2平場の整地層中から検出され、18世紀後半～19世紀前半までの近世陶磁器が中心であることから、整地が19世紀前半代に行われ、2号石垣も同じ時期に築かれたと考えるのが妥当であろう。その他の石垣については年代がはっきりしないが、絵図の描写から3号石垣は近世の所産と考えたい。

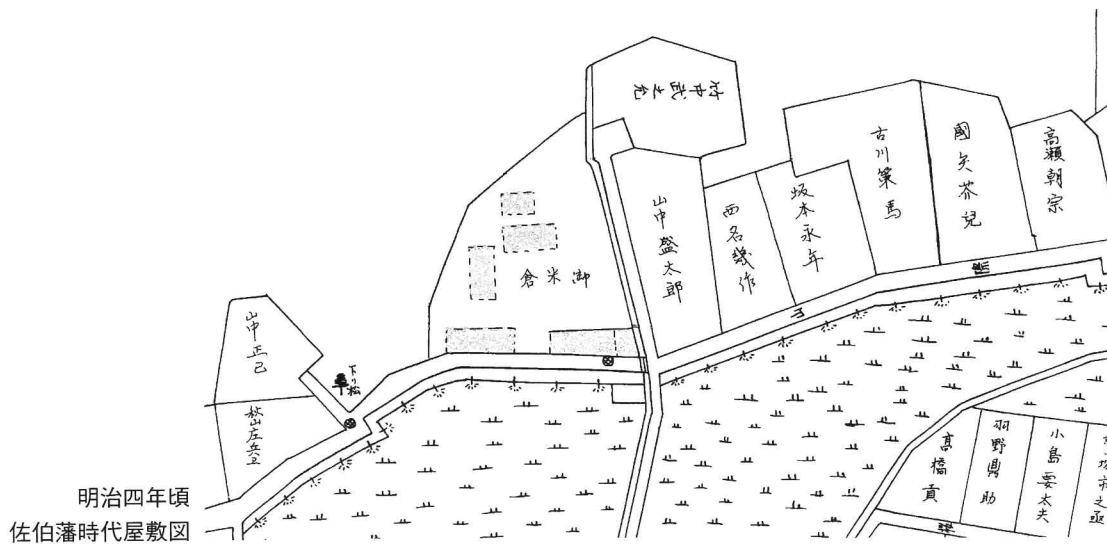
元文絵図と文政・明治絵図では、調査した2軒の屋敷地はその居住者が異なっている。前者では通り側の区画は[羽野家]、山側は[永留家]もしくは[永富家]、後者では[山中家]と[竹中家]の屋敷地となっている。今回の調査で確認された19世紀前半の整地と居住者の移動とをただちに関連付けることはできないが、この2区画だけでなく山際通りの他の屋敷地でも、元文と文政の間に居住者の移動がかなり行われている点は注意する必要があるだろう。



御城並御城下絵図
元文三年



御城下分見明細図繪
文政九年



明治四年頃
佐伯藩時代屋敷図

第21図 各時代の佐伯城下町絵図（調査地点周辺）

写真図版 1



調査前全景（西側斜面より）



1号石垣北端



1号石垣全景



2号石垣中央部



2号石垣北端



2号石垣南端



3号石垣全景



3号石垣南隅部（崩壊状況）



3号石垣中央部



3号石垣南隅天端



3号石垣北側側溝



4号石垣全景



1・2号土坑（左：1号、右：2号）



1号土坑遺物出土状態



第2平場遺物出土状態①



第2平場遺物出土状態②



調査区全景（完掘状況）



2号石垣出土遺物



1号土坑出土遺物



1



2



3



4



3

2号土坑出土遺物



5,6,7(上から)



1

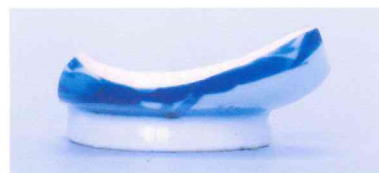


2

第1平場出土遺物 (3層)



3



写真図版 5



4



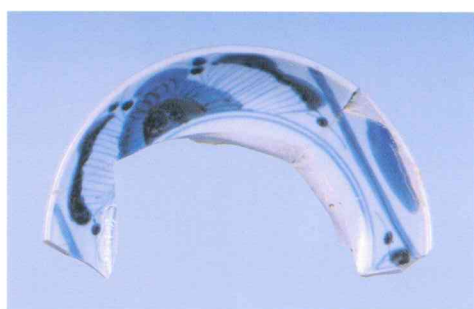
6



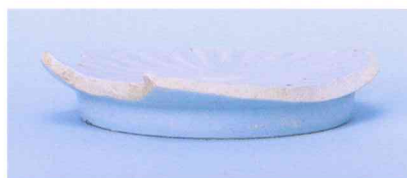
5



7



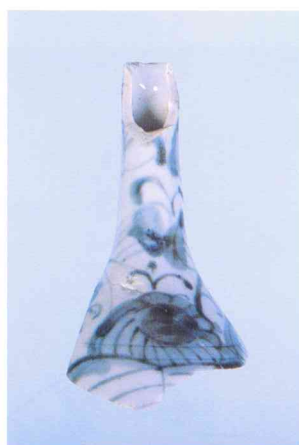
8



9



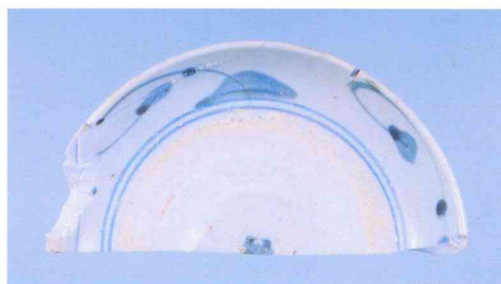
10



11



12

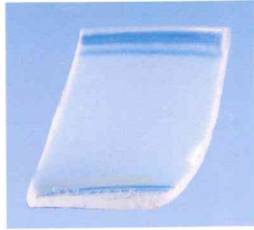


13

第1平場出土遺物 (4~11:3層、12・13:攪乱層)



1



2



3



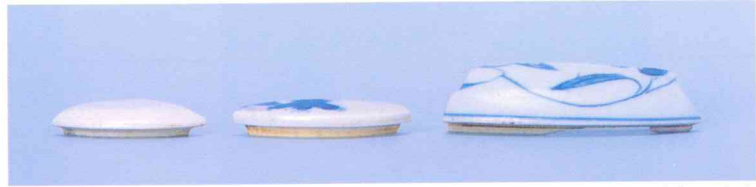
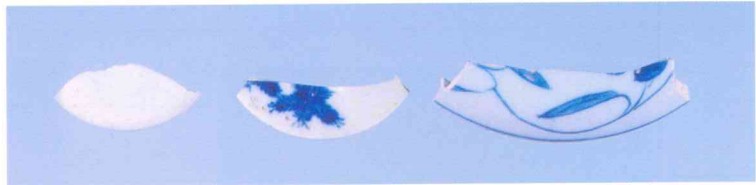
5



6



4



8,9,10(左から)



7



12



13



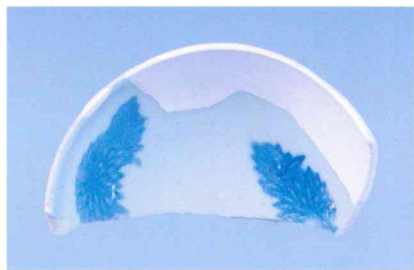
14



11

第2平場出土遺物 (1~12:2層、13・14:3層)

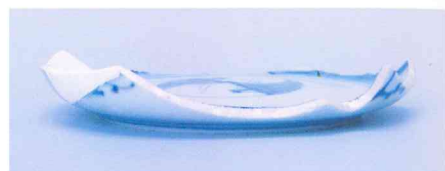
写真図版 7



16



15



17



18



19

第2平場出土遺物 (15~18: 表土、19: 排土)



1~5 (左から)

第2平場出土金属製品



第2平場出土銅銭 1,2 (左から)

報告書抄録

ふりがな 書名	さいきじょうかまちいせき やまなかけやしきあと たけなかけやしきあと 佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡
副書名	平成13年度予防治山事業(城山)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉武牧子
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町	おおいたけんさいきし 大分県佐伯市	430	012			01.03.01 ~03.23	480m ²	予防治山 事業
やまなかけやしきあと 山中家屋敷跡	あざしろやま 字城山							
たけなかけやしきあと 竹中家屋敷跡	じょうかひがしまち 城下東町 776番2、779番					01.04.16 ~06.19		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町 山中家屋敷跡 竹中家屋敷跡	武家屋敷	近世	石垣 土坑	近世陶磁器・土器 金属製品	

平成13年度予防治山事業(城山)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

佐伯城下町遺跡
山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡

2003年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
TEL 0972-22-3111

印刷 (有)勉強堂美術精版社
〒876-0832 大分県佐伯市船頭町2番52号
TEL 0972-22-1324